（上）シオラパルクの村　（右）妻のアンナさんと

北緯78度のグリーンランド北部の地球最北の村、シオラパルクに住んで35年になる大島育雄さん（61）。アザラシやセイウチなどの海獣を捕る猟師として、イヌイット（エスキモー）とともに暮らしているが、昨年11月末から1月初めにかけて、4年ぶりに帰国。大島さんは東久留米の出身で農家の長男、実家は現在清瀬市にある。

●●Interview●●

地球最北の村で猟師として暮らす

大島育雄さん（東久留米市出身）

日本大学の山岳部に所属していた大島さんは、極北の地へ興味を持ち、山岳部OBでつくっていた「極地研究会」で北極関係の資料を漁っていた。そうして1972（昭和47）年、極地の高峰に遠征する準備のため、また委託されたエスキモー民具の収集のため、1年間滞在の予定でシオラパルク村を訪れた。

同じ頃、冒険家の故・植村直己氏も犬ぞりの技術を習得するために滞在していた。二人は3ヶ月間、村の小屋で生活を共にし、イヌイットの流儀を学んだ。言葉や食べ物、猟、犬ぞり、二人が酷寒の地で初体験する様子が1989年に出版された、大島さんの著「エスキモーになった日本人」（文藝春秋）の中に生き生きと記されている。

1年後帰国、しかし大島さんは実体験を通して、自由に生きられるイヌイットの暮らしに強く惹かれていた。折しもテレビ局からドキュメント番組取材同行の依頼を受け、3ヵ月後に再びシオラパルクへ。そのままこの地で暮らすことになり、1974年に村の女性アンナさんと結婚。1男4女をもうけ、孫も7人いる。35年の間にシオラパルクの生活環境も変わった。90年代に発電所ができ、長男の海（ヒロシ）さんはインターネットで道具類を買っている。携帯電話も通じるようになった。しかし大自然を相手の単純で勇猛な仕事は変わらない。大島さんは今や村の長老。日本人がイヌイットの伝統を守っているかのようだ。

「帰国するのに靴がなくって、娘婿のを借りてきたんですよ」と屈託なく笑う。村で履くのはアザラシの毛皮やシロクマの毛で作った防寒靴だ。狩猟の話をしている大島さんは終始ニコニコ。自然体で穏やかでこちらも気分がホンワカしてくる。

しかしその生命の糧の猟が今、脅かされている。「ここ10年ほどは気温が下がらず、海が凍る時期が2ヵ月以上遅れています。以前は12月から7月まで犬ぞりで遠くまで猟に出かけられたのが、今は4ヶ月くらいしか犬ぞりが使えない。海氷が突然割れて危険なこともある。昔はカナダまで犬ぞりで行けたものです」

村の人口は60人ほどだが犬は200頭以上いる。狩人たちはスノーモービルの使用を制限している。費用がかかるし、燃料代も要る。その分余計に動物を捕らなければならないからだ。次の代まで動物を確保しておくために、必要最低限しか捕らない。猟場で解体し、命を奪った責任者としてすべてを無駄なく処理する。そして自分の家の食料や衣料に充てる分を確保した後のものを買い上げてもらう。最後の残りが犬のえさとなる、究極のエコ生活だ。

けれども、欧米強国が押し付ける動物保護のため、セイウチやシロクマ、クジラなどの捕獲頭数が厳しく制限されている。モノがあふれる国々が排出する温室効果ガスが地球温暖化につながり、CO_2を出さない最北端の少数民族の生活を圧迫している。

グリーンランドはデンマーク領のため医療費、学費はタダ。老後も保障されているので「カネは要らない」と言う。「モノやカネに縛られず、あと5～10年は猟を続けたい。孫のイサムの代まで凍った大海原を犬ぞりで走れるように」と願っている。太陽が昇らない4ヶ月間の墨絵の世界から解放され、ようやく村は2月半ばに初日の出を迎える。

4年ぶりの清瀬の実家で